

9.18 金 9.19 土 第388回 定期演奏会

西田紘子(九州大学大学院 芸術工学研究院 准教授)

ベートーヴェン生誕250年にあたる2020年度の定期演奏会は、《第九》とならぶ集大成《ミサ・ソレムニス》で幕を開ける予定だった。しかしこれは中止となった。それゆえ、実質的には本日が、小泉音楽監督と九響によるアニバーサリーの始まりとなる。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)

交響曲 第2番 二長調 作品36

本作が完成されたのは1802年。1802年というと、難聴に悩むベートーヴェンが、快復への望みを絶たれて「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた年である。10月、弟たちに宛てた手紙には「わが芸術だけが私を引きとめた」と綴られている。こうして彼は、現実では得ることのできないものを、芸術世界に託す決意を固めたのだった。

本作は、この遺書と同じ年に書かれたとは思えないほど堂々とした曲調になっており、それが長らく人々を驚かせてきた。しかし、実際には、本作は遺書を書く前にほぼ書き終えられており、遺書の執筆と作曲の時期はどうやら完全に重なるわけではないようだ。

作曲スケッチは、1800年にさかのぼる。1802年初めには、フィナーレの詳細な草稿が別のスケッチ帳に書きとめられている。この頃、アカデミー(慈善公演)の開催を期待していたようだが、会場を借りることができずに頓挫した。

実現したのは、そのあと1年も経ってからだ。曲目は、本作と第1交響曲、ピアノ協奏曲第3番、オラトリオ《オリーブ山のキリスト》というオール・ベートーヴェン・プログラムであった。第1交響曲以外はすべて初演作である。

ところで、当時の聴衆はこの交響曲をどのように受けとめたのだろうか。1804年3月にパート譜が出版されたとき、ライプツィヒの『一般音楽新聞』の評者はこう述べている。「一風変わった巨大な作品」

で「かつて知られたどの交響曲よりも演奏の点では難しい。」

作曲家の要求が高いのは、なにも演奏者に対してだけではない。続きを読もう。「教養のある聴き手であっても[中略]熱狂しつつも必要な落ち着きをもって味わうためには、この交響曲をくり返し聴く必要がある。」

ベートーヴェンの作品は一味違うので、何回も演奏したり聴いたりして「慣れる」必要がある、というわけだ。その要望に応えるべく、作曲者自身が、愛好家が気軽に親しめるようピアノ三重奏曲版を編曲している。

第1楽章 序奏部：アダージョ・モルト 二長調 4分の3拍子—

主部：アレグロ・コン・ブリオ 4分の4拍子

2つの主題の「提示部—展開部—再現部」からなるソナタ形式。スケッチ段階では、序奏部は3拍子ではなく、主要主題も次作《エロイカ》交響曲の主題に近いものだった。

第2楽章 ラルゲット イ長調 8分の3拍子

ソナタ形式。ベルリオーズはこの楽章を「純粹無垢な幸福の描写」と評している。

第3楽章 スケルツォ：アレグロ 二長調 4分の3拍子

「主部—中間部—主部」からなるスケルツォ。それまでの「メヌエット」に代わり、得意の創作領域である「スケルツォ」が交響曲でも切り拓かれた。

第4楽章 アレグロ・モルト 二長調 2分の2拍子

冒頭の主題ではフォルテとピアノのコントラストが劇的。そのためか、当時は「騒々しい」といった批判も招いたようだ。

作曲／1800～1802年 初演／1803年4月5日ウィーン、作曲者自身の指揮
編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部
使用楽譜／ブライトコプフ&ヘルテル

ヨハネス・ブラームス (1833-1897)

交響曲 第2番 二長調 作品73

「新作の交響曲は、あまりにメランコリックなので、あなたには耐えられないでしょう。これほど悲しくあたたかい作品は、まだいちども書いたことがありません。」

これは、ブラームスが1877年11月22日、出版者ジムロックに宛てた手紙の一節である。しかし、この作品には穏やかな陰りはあるものの、悲嘆に暮れ続けるような調べは聴こえてこない。

そう、どうもこれはブラームスの冗談であるらしい。この作曲家のイメージからすると、ジョークなど言いそうもないように思われるかもしれないが、実際のところ、当時の彼はとても開放的な気分にあった。

というのも、20年あまりを費やした交響曲第1番が前年に初演され、その後各地での演奏が続き、名声は国外にも轟きつつあった。ともかく長きにわたるプレッシャーから解放されたところだったのだ。

そのせいか、本作は短期間で書きあげられた。1877年6月から9月上旬まで、彼はオーストリアの避暑地ペルチャハに滞在した。毎日、湖と山の中にメロディを聴きとり、精力的に書き進めていく。9月にはドイツに移り、10月初めにはクララの前で作品の一部をピアノで披露している。

第2番には彼の交響曲の中で唯一チューバが登場する。その代わり、他の3作で活躍するコントラファゴットの使用は控えている。また、ブラームスのこの試みに影響を受けたのか、ライバルと目されていたブルックナーも、この頃、初めて交響曲にチューバをとり入れている(第5番)。

ちなみに、第1楽章の冒頭でいきなりトロンボーン3本とチューバによるコラールが聴かれる。それまであまりみられなかった用法であることから、昨年亡くなった音楽評論家の佐伯茂樹氏は、死の世界を暗示したものではないかと推測している(『名曲の暗号』より)。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo 二長調 4分の3拍子

ソナタ形式。出だしの低弦による「レ・ド#・レ」というモチーフは、全楽章を通して変形されつつ姿を現し、作品に統一性を与えている。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロppo ロ長調 4分の4拍子

冒頭では、物憂げに下行するチェロのメロディが注意を引くが、同時にファゴットがその逆の上行形を奏でている。このように、素材が対比的かつ緊密に編み込まれているのが、彼ならではの技法だ。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ(クアジ・アンダンティーノ) ト長調 4分の3拍子—プレスト・マ・ノン・アッサイ 4分の2拍子

ティンパニや低音金管はお休み。木管楽器の「優美な(グラツィオーソ)」合奏が中心となる。この主部に、テンポを速めたトリオが2つ挟まれる。

第4楽章 アレグロ・コン・スピリト 二長調 2分の2拍子

ソナタ形式。冒頭楽章とは異なり、トロンボーンとチューバは再現部までとっておかれ、コーダの祝祭性を一気に高める。

作曲/1877年 初演/1877年12月30日ウィーン、ハンス・リヒターの指揮
編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦5部
使用楽譜/ブライトコプフ&ヘルテル

※編成は使用楽譜に基づくもので演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。